

薬草園の花だより

第 29 号

2021 年（令和 3 年）6 月 25 日発行

■第 29 号に寄せて

新型コロナウイルス感染（COVID-19）に気を配りながら過ごすのが日常となり、まだマスクが手離せない生活を強いられている毎日です。しかし、徐々に対面式の講義や実習も始まりました。少しずつでも以前の生活に近くなっていくことを願っています。夏至（6 月 22 日）を過ぎ、真夏に向かっていますが、皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、ここ日本薬科大学薬用植物園の所在地は温帯にあたります。しかし、薬用植物の中には亜熱帯～熱帯に自生する植物も多くあります。そのため、このような植物を栽培するために温室という設備が不可欠となります。幸いにも本学には立派な温室があり、このような植物の栽培も可能で、アフリカやインド、東南アジア、南米などの亜熱帯～熱帯産の植物も多く栽培されています。インド産のインドジャボク（印度蛇木）などはインドの原産地で見たものよりも元気に育っており、よく花もつけています。学内にいながら世界中の薬用植物が観察されるというのはとても恵まれたことと思います。この温室は大学の開学以来活躍していますが、年月の経過でガラスの中には傷んだものもあり、また汚れも出てきました。そこで、今月、全面的な修理と洗浄作業が実施され、おかげさまで見違えるようにガラスが綺麗になり、温室内から見上げる青空もさらに清々しく感じるようになりました。

一方、このたび、薬用植物園から少し北の方向に向かったところに新たに「日本薬科大学ハーブガーデン」が新設されました。ハーブは他の薬用植物との混同は避けなければなりませんし、中には雑草化して他の植物を枯らしてしまうものもあります。そこで、これらのハーブの栽培のための圃場を他の薬用植物とは別としたわけです。是非、よりきれいになった温室や新設のハーブガーデンにも足を運んでみてください。（日本薬科大学薬用植物園長／船山信次）

■今咲いています・見頃です

本格的な夏がやってきます。春の花がひとしきり咲き終わり、6 月の前半はちょっと花の少なくなる時期でしたが、6 月後半となり、今度は夏の花が咲き始めました。種を蒔く時期について、一般に「春蒔きはゆっくり」と、そして「秋蒔きは急いで」と言われます。これは、春蒔きして夏から咲く花の種の発芽と生育には高い温度が必要なものの、生育の早いものが多い一方、秋蒔きして冬を越させる植物は本格的な寒さの来るまえにある程度、根を張らせる必要があるからとのこと。真夏の花のマツバボタンはつい最近播種したばかりなのに、あっという間に花をつけるくらい大きさに育ちました。クレオメも急速に大きくなり、たくさん咲きそうです。一方では温室で春先に種を蒔いてある程度育ててから圃場に植え替えなければ十分に育たないものもあります。たとえばチョウセンアサガオは若干寒さに弱く、しかも今の時期にはある程度の大きさに育ってしまわないと花をつける時期に十分な大きさに育たないので早春に温室で播種します。

〈コーヒーノキ〉

温室の中央棟にてアカネ科のコーヒーノキ（*Coffea arabica*）がたくさんの花を一斉に咲かせ、現在は、果実をつけ始めています。まだ未熟で小粒のものもあり、緑色をしています、これから赤く色づいてくると思います。



コーヒーノキが結実

この世の中の様々な飲み物のうち、緑茶、紅茶、コーヒー、そしてココアは「世界四大飲料」と言ってもよいのではないのでしょうか。このうち、緑茶と紅茶はいずれもツバキ科のチャノキ（*Camellia sinensis*）の葉を原料としますが、これに対して、コーヒーとココアはそれぞれ全く別の植物を材料としています。すなわち、チャノキの原産地は中国大陸ですが、コーヒーノキの原産地はアフリカ大陸のエチオピアであり、そしてココアの原料となるカカオを産するアオイ科のカカオノキ（*Theobroma cacao*）は中央～南アメリカの熱帯地域を原産地とします。このように世界中のそれぞれ離れたところで見出された飲料であるにもかかわらず共通にカフェイン系のアルカロイドを含むことには大変に興味を持たれます。

今では海外でも冷たいコーヒーを飲むのは普通となってきたと思いますが、

筆者がシカゴのイリノイ大学に留学中の1980年代の初めの頃には、アメリカでは冷やしたコーヒーを飲む習慣はなく、夏場には妻に入れてもらったアイスコーヒーをポットに入れて研究室にもっていくのを習慣にしていました。ある日、日本の種々のことに興味を持つ同じ研究室の大学院生G君に「日本では冷やしたコーヒーも飲むけど美味しいよ。飲むかい?」と言ったところ、「冷たいコーヒーを飲むなんて考えられない」と断られたことを思い出します。今は彼らも普通にアイスコーヒーも飲んでいることでしょうね。そういえば、当時のアメリカではまだ日本人が生魚(刺身・寿司)を食べることがとんでもないという感じがありましたが、今sushiはアメリカでも人気食。日本の飲食文化の伝播の話です。

《バナナ》

温室の東棟にてラン科のバナナ (*Vanilla planifolia*) が育っています。今年も花を着けたものの、残念ながらあっという間に落ちました。1日花であり、受粉しない限りすぐに散ってしまいます。この花を見るとまさにバナナがランの仲間であることがはっきりとわかります。もしうまく受粉し結実すると細長い果実をつけますが、この果実を発酵させたものがバナラビーンズと呼ばれるものです。そして、バナラビーンズの香りの主成分がバニリン。この香りが本能的に人間に好かれることからアイスクリームの香料として最もポピュラーなものとなっています。

なお、日本人ならずとも非英語圏の人間にとってバナラの発音は最も難しいもののひとつであるとか。極端と思われるかもしれませんが、こちらではバナラと言っているつもりなのに、英語圏の人間はバナナと聞き間違えてしまうこともよくあると言われます。温室ではバナラに隣接してバナナを植えています。ここにいらしたら、両者の発音の練習をしてみてくださいはいかがでしょうか。



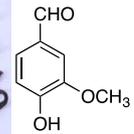
バナラ



バナラの花
(野本有香氏撮影)



バナラビーンズ*とバニリンの化学構造
(*日本薬科大学漢方資料館所蔵)



■次のような植物も開花中です

今、温室南側の圃場にてノカンゾウやヤブカンゾウが花をつけています。この仲間の植物は園芸界では学名(属名)のヘメロカリスの名で呼ばれるのが普通で、園芸種もたくさん出回っています。野生のヘメロカリスの中では、ニッコウキスゲはすでに咲き終わりましたが、これから晩夏に至ると魅力的なクリーム色の花卉を持つユウスゲも咲き、結構長い期間楽しめます。



ニッコウキスゲ



ノカンゾウ



ヤブカンゾウ

これらのカンゾウはワスレグサ科(旧ユリ科)の植物で、漢字では萱草と書き、マメ科のカンゾウ(甘草)とはまったくの別物です。また、温室北側でウツボグサが咲き終わろうとしています。この植物は夏の盛りに花が枯れるためにカゴソウ(生薬名も夏枯草)ともいいます。温室南側圃場ではベニバナ(生薬名は紅花/コウカ)やニチニチソウも満開です。

■薬用植物園からのお知らせ

《金魚やメダカにも会いに来てください》

薬用植物園温室内のコンクリート製水槽では今、熱帯スイレンが咲いていますが、この水槽にはたくさんの金魚が泳いでいます。この金魚たちは冬をここで過ごし、子供も生まれています。また、薬用植物園の北側圃場の水生植物栽培地区の水槽には各種のメダカが泳いでいます。是非、機会を見つけて、薬用植物園を訪れてみてください。お待ちしております。

発行：日本薬科大学薬用植物園